

# 2015年度セミナー(東京会場) 研究の技術を磨く講座 講座Ⅱ「事実を測定する(量的分析)」 受講者レポート

12月に終了した「講座Ⅱ」を受講された方のレポートを掲載します

2016年2月には「講座Ⅲ」を予定しています  
参加希望の方は本ホームページのセミナーのご案内をご覧ください

2015年12月26日(土)27日(日)  
講座Ⅱ 「事実を測定する(量的分析)」  
講師 只浦 寛子先生  
国際医療福祉大学大学院教授  
疫学研究方法論



## ◆ 若林あんしんすこやかセンター 佐藤 恭子 さん

講座Ⅱは「事実を測定する(量的分析)」でした。

量的分析というと、パラメトリック検定、分散分析、ロジスティック回帰分析等々・・・文系出身の私には文字を見ただけで頭が“分散”して過去に“回帰”したくなる苦手な領域で、だからこそ、受講しようと思ったのですが、正直、気が重い部分もありました。ところが、講座の前に講師の只浦先生から届いた事前課題は、「研究テーマを見つける」ためのワークシートでした。自分の臨床経験の中で湧いてきた疑問などを研究テーマとして形作っていくための具体的な作業手順が分かりやすく示されていました(と言っても、実際はかなり頭を悩ませる作業でしたが・・・)。

その事前課題も含め、2日間を通じて学んだことは、具体的な分析方法のみならず、「研究とどのように向き合うか」という根本的な姿勢でした。講座1日目に、研究の目的と意義について、じっくり時間をかけて講義していただけたことは大変有益でした。講義の概要は、以下の通りです。

まず、研究テーマを見つけるポイントとして、自らの「感覚」にアクセスすることだとお話がありました。臨床の現場で忘れられない患者・利用者があるとすれば、なぜその患者・利用者のことが忘れられないのか?何が心に響いたのか?そのときの感覚(喜び・悲しみ・怒り等々)を思い出し、その感覚(感覚は自分の価値観に通じるもの)にフォーカスをあてて掘り下げていくことでテーマが見えてくる。自分が出会った、そのひとりの患者・利用者を救いたい!という熱い思いから研究が始まり、その患者・利用者を救うことが研究の目的となるのだと強調されていました。

そして、研究方法は手段であり、何をやりたいのかははっきりさせることで研究の方法論が明らかになってくる。よって、自分がやろうとしていることを明確にすることに時間をかけることが大切だとのことでした。

さらに、研究の意義について、自己満足のためではなく、社会の動向や既存研究の位置づけを踏まえ、自分がやろうとしている研究がもたらす利益は何か？誰かのためのものになっているのか？社会にメッセージがあるのか？という点をよく考え、他者にその意義を説得できるかという点も大事だとおっしゃっていました。

以上のような講義とともに、事前課題のワークシートを見直し、作り上げていったのですが、ポイントは、その作業を一人でやるのではなく、隣に座った方と意見交換しながら、さらに深めていくのです。他人に話すことで、曖昧だったり、不足している部分に気づくことができました。私が自身の研究目的や意義を明らかにしていく過程で頭を悩ませていたのは、先生のおっしゃる「掘り下げ」が十分ではないためだと分かりました。

また、講義では、何度も「羅針盤」という言葉が出てきました。研究は時間も労力もかかり、いろいろな壁にぶつかるため、迷ったり、悩んだり、自分がどこに向っているのか分からなくなったりすることがある。そんな時にも、「羅針盤」があれば、自分が進むべき方向を指し示してくれる。「羅針盤」となる研究目的と意義をはっきりさせることが何よりも大切で、その掘り下げに時間をかけなければならない、というお話がお腹にストンと落ちました。研究に取り組んでみようとしている者として、一番根幹となるべき点に改めて気づかせていただき、教科書だけでは学べない多くの収穫がありました。



2日目は、量的研究の基礎的な知識の講義とSPSSの演習を取り入れた実践的な技術のトレーニングでした。統計の基本を理解するというところで、講義と練習問題を解くという作業を通じて学んでいきました。ともすればアレルギー反応を起こしやすい統計解析ですが、確実に押さえておかなければならないポイントに絞って、分かりやすく解説していただきました。

SPSSの演習ではサンプルデータを使って操作してみましたが、時間があっという間に過ぎてしまい、もっとやりたい！と感じた方が多かったのではないのでしょうか。SPSSについては、書店にたくさんのマニュアルが並んでいますし、「習うより慣れろ」で、実際に分析を行っていく中で習得していくことができると思います。大事なことは、統計解析は、「キーワードの定義をはっきりさせる」「可能な限り誤差を排除する」「変数の種類や内容を間違えない」など方法論の検討に十分時間をかけること、方法論が間違えると意味がないことを教えていただきました。限られた講義時間の中で、量的分析のエッセンスが学べたと思います。

次回の講座Ⅲは質的分析がテーマですが、量的分析に加え、また新たな気づきや学びがあるだろうと思うと楽しみです。

最後になりますが、常に臨床と向き合い、グローバルに活躍されている研究者ゆえの、示唆に富む貴重なご講義をいただいた只浦先生と、参加者が快適かつ有意義に過ごせるよう、講義中、休憩時間を通して、細やかな配慮、心配りをしてくださった研修スタッフの皆様から感謝申し上げたいと思います。ありがとうございました。



### ◆西陣病院 勝尾 一史 さん

現場のソーシャルワーカーにどんな量的分析が行えるのか、個別性の中に意味や意義を見出そうとする普段の思考に、数量化という考え方をどのように馴染ませることが出来るのか、そんな漠然とした自問への答えを体感したいと思い、本講座を受講させていただきました。

まず、講座の概要についてです。本講座は、ワークシートをもとにした事前学習から始まりました。ワークシート（A4用紙5枚）は、「研究テーマを見つける」「研究背景」「研究の意義、新規性、独自性」というテーマのもと更に細分化された質問に答えていくワークシート1と、「研究方法」を主題に研究対象とする変数や変数同士の関係性、それらの測定方法を考えるワークシート2からなっていました。

このワークシート1をもとに1日目の講義が展開されました。臨床現場から湧く疑問は？ その時の自分の感情は？ そこに隠された自身の価値観は？ そしてこの疑問は自分にとって・社会にとって・ソーシャルワークにとってどんな意義があるのか… 日々の自分自身と徹底的に向き合うことを求められるワークのただ中で、只浦先生のことばが説得力をもって自らに迫ってきます。「自己都合のための他者活用ではなく、他者貢献のための自己活用を」

「研究においては、多くの人にfocusを当てながらも、誰かこの人のためにと考える、身近なたった一人を見つけていくことから始める」。研究のスタート地点に立つために、心と頭をフルに揺さぶられた1日目でした。





2日目はワークシート2をもとに、変数というものを理解しながら、研究のOutcomeとEndpointを定めることから始まりました。その上で、対象抽出の方法や尺度水準、統計解析の目的と方法、データをSPSSに落とし込む実際を、確認問題を解いたり、パソコンに向かいながら学びました。単に教科書を読むだけでは得られない、量的分析の作法・素養を頭と身体で吸収していった2日目でした。

以下、本講座を通してのわたし自身の気づきと学びです。

いかに自分が曖昧さに逃げているか。目に見えないものについての探究を求めながらも、自己完結する発想や思考の中にとどまってしまっている。

可視化しにくいからこそ、何らかのカタチで数量化していくことに価値があり、そのカタチを求めていく頭脳の使い方やそこでの作法はソーシャルワーカーにとって必須である。

自分が何のために、何をわかろうとし、それにどのように取り組むのかということに、自分自身を周囲に開きつつ、徹底的に向き合うことができるようになりたい。そのためにあらためて、目の前のクライアント一人ひとりに真っ直ぐに向かうことから再出発したい。

「創造性とは、知らないことを心地よく感じる能力である」、只浦先生の教を胸に、わからないことに焦ったり、そこから逃げたりせず、創造性を体現できるように研鑽していきたいと思います。

最後になりましたが、多大な準備と創意工夫をこらした密度の高い2日間を通して、ソーシャルワーカーに量的分析の真髄を伝えてくださった只浦先生にあらためて心からの感謝を申し上げます。同時に、本講座を企画・運営してくださった学会理事の皆さまに感謝いたします。ありがとうございました。



佐藤さん、勝尾さん ありがとうございました。

講座Ⅱ終了後に参加者からいただいたご感想、ご意見は今後のセミナー運営に活かしてまいりたいと思います。あらためて、只浦先生、ご参加の皆様にご感謝申し上げます。

日本医療社会福祉学会事務局